

ガーデニングと植物の居所

ペットのネコは昔から人と居所が重なっている。犬の方は家の外にいて主人の警護や使い走りを務めていたが、最近では人の居住区に上がり込み居候を決め込んでいる。しかし、ペットがいるから家が狭くて困るとか、家を建て増すとかの話は聞かない。

これに対して植物の方はどうだろう。植物によって差があるにしても、生きていくためには「光合成」が必須である。ほかの植物が合成した「エサ」を与えて、済ますわけにいかない。だから植物は家の奥に潜りこむことができず、サンルームやベランダ、庭、屋上などが必要になる。これらはとうぜんマイホームの購入や家の設計に影響を与える。だが、ガーデニングを考えた建売やマンションは少ないように思える。価格の高騰を招くからだろう。

総務省は、03年10月時点での住宅・土地統計調査を発表した。それによるとマンションやアパートのような共同住宅が、初めて居住住宅全体の4割に達したという。東京23区や千葉、横浜、さいたま市など、関東大都市圏では、その割合はもっと大きく55%であった。さらに5年前に比べ、11階建て以上の共同住宅が38%増えて、高層化が進んだ。このような住宅の集合化や高層化が、人の住み方を確実に変える。

大げさに言えば、「人口密度」の増大がガーデニングの内容を変える。

NHKの「趣味の園芸」を観ていて不思議に思ったことがある。取り上げられる植物は、ことごとく「鉢物」にさせられている。これは、放送局の本拠のある東京の感覚に基づいた、地方とは異なるガーデニングの「東京スタンダード」かと思った。だが、共同住宅が日本の住宅の4割を占めるようになると、「鉢物」園芸が日本のガーデニングの主流にならざるをえない。

むろん、市街地の共同住宅に限らず、東京の下町や広島漁港にひしめく家々からも、花に覆われた鉢、プランター、トコ箱が狭い路地まで押し出している。そこには古くからの庶民的なガーデニングの世界が展開する。

このように植物の居所が狭いゆえに、場所を取らない栽培技術が要求される。「趣味の園芸」のQ&Aを観ていると、鉢が根詰まりした場合、鉢を一回り大きくするのが定法なのだが、それを避けて植物を大きくしないためにはどうしたらいいかという質問が目立つ。いっぽう、いろいろな植物を「寄せ植え」にすることが盛んに企画される。これも居所を節約するためのアイデアではないかと思ってしまう。

植物を積極的に矮小化する生化学的な手法として「矮化剤」が開発された。矮化剤は植物の生長を調節する有機化合物の中の1グループである。しかし、矮化剤を用いるガーデニングは「自然らしくない」という意見もある。

多種類の植物を楽しみたいのはやまやまだけど、人の空間を確保するのが第一、だから植物の居所は狭い。ヒトが好む近年の人口集中に逆らえず、ガーデニングの変質は進行する。
